

第二講 人は何故過去を記憶し、記録しようとするのか？

レポート講評

文化史の個性を問う1（文化史学とは何か）に関しては、文化史の総合性を指摘するレポートが多かった。問題は文化史学の総合性が歴史学の総合性とどう違うのかという問題に接近されていないということにある。なぜ文化史学では考古学が重要な領域として内包されているのか。逆に歴史学において考古学は補助学と位置付けられ、歴史学からは独立した学問領域として扱われている。そのことに目を向ける必要がある。

文化史の具体的な中身を問う2（美術史や文学史、思想史などと文化史の違いは何か）に関しては、美術史や文学史、思想史との方法論において差別化を展開することが出来ていない。多く見られたのは美術史や文学史、思想史が文化史の一分野に過ぎないと論じているだけである。授業で言及した美術史や文学史、思想史にはそれぞれ異なった学問的基盤があり、美術史には美術（芸術）学部・学科・専攻という組織と独自の方法論・学問の枠組みがあること、同様にして文学史には英文学や日本文学などの学部・学科・専攻があること、思想史には宗教・哲学などの学部・学科・専攻があることを忘れてはいけない。文化史には文学部に帰属する文化史学科・専攻という組織と独自の方法論・引照体系がある。そのことが文化史研究を特徴付けていることに気付いて欲しい。

レポートの課題3（ノブゴロド公国やキエフ公国についての教科書の記述の問題点）に関しては、現代の文化史学や歴史学の大きな問題はレンズとしての国民国家や民族への懐疑と批判があることに注意することが求められている。国民史、民族史として過去をまとめて来た近代歴史学や文化史学の有効性を考え直していくことが求められている。ウクライナの問題や東アジアや東南アジアでの領土や海洋権益をめぐる紛争・軋轢は近代の産物である国民国家の人為性、国家への統合装置と化した民族意識、プロパガンダ化した民族主義の排他主義を露呈させている。国民国家や民族という枠組みは時代遅れなのか、それとも今なお人々を拘束し続ける有効な概念なのか、そのことを考えて欲しかった。スウェーデン系ノルマン人

のスラブ化という教科書の記述に疑問を提示するレポートは多かった。キエフをロシアという空間の中に位置付ける教科書の記述はたしかに民族国家の枠組みの中で歴史を叙述する近代歴史学の基本に相反する。さらに言えばスウェーデンという国民国家が出現する以前のスカンディナビア半島出身のノルマン人にスウェーデン系と名付けるのはおかしなことではある。

以上のレポートを通して、歴史学には軸がない。あるのは取り換えられていくパラダイムとパラダイムの束だけだということが明らかになってくる。しかし文化史学の現状に問題がないのか、という疑問も浮かび上がってくる。文化史学のパラダイムが全く意識されていない。その為に文化史学にはパラダイムがないのか。あるのは個々の研究者が取り扱っている個別の分野だけだ、ということに落ち着くのか。求められているのは文化史学の包括性・全体性を主張する枠組みと方法ではないのか。同じように包括性・全体性を自明の前提としている歴史学もその個性を鮮明にしてい
く必要がある。それらを曖昧にしたまま過去と対峙しても広がりを持たず、長続きしない文化史像・歴史像を再生産し続けることになりはしないか。

レポートへの導入：アッピア街道沿いの富裕な解放奴隷の墓と墓碑
忘却への恐怖と永遠への願望、第三者への訴え

【本日のレポート】

人は何故過去を記憶し、記録するのか？

記憶と歴史

記憶と歴史は相反するのか？

歴史とは：・人間の営為を記録し後世に伝える（ヘロドトス）

偉大な業績が忘れ去られていくことから救うため

忘却（自然）に抗して記憶（人為）しようとする意志

永遠に対する挑戦

記録・記憶に残すという行為

意図して残すもの：日記・切り抜きファイルなど
意図せずして残ってしまうもの：携帯の着信記録など

記憶の問題

・記録される記憶の場の問題

どこに記憶されるのか？

何に記憶されるのか？

マラトンのトロパイオン・・・

現在マラトン国立博物館所蔵

イオニア式の柱（溝なし）

柱頭にニケ像

マラトンのソロス・・・192名の戦死者

英雄神として祭典を挙げる

ヘロドトスの『歴史』6巻での記述

現代での再生

ミルティアデスの彫像

近代オリンピック競技のマラソン

エウクレス（またはフェイディッピデス）が完全
武装のままアテナイに走り、「我ら勝てり」と告げ
て絶命したという伝承に基づく

TV番組（Decisive Battles - Episode 4 - Marathon, 490
B.C.）

現地の情景、レポーター、コンピュータグラフィック
による再現、ポール・カートリッジやハンス・フ
アン・ウィースらの歴史家のインタビュー

コリント式のかぶとを着用、騎兵部隊の展開

当時存在していないエレクテイオン神殿、パルテノ
ン神殿

完全装備で駆け足突撃（80メートルが限界！）

スコイニア浜の海岸線の変化

2011年のセレモニー（<http://youtu.be/YaOJ48Dyomg>）

6名のペルシア兵、44名のアテナイ兵
戦勝記念柱の前での儀式
スコイニア浜での模擬戦（水泳客の前で）
世界史の教科書での記述